

## まどい × マワリニワ

従来、保育園の中で子どもたちが過ごす主な居場所は保育室であった。しかし、保育室での活動だけでは乳幼児期の発達に応える環境が確保しにくい。そこで中二階である「まどい」を設けた。本来「まどい」とは人々が円になって座ることであり、親しい人たちが集まり和やかに過ごす様子を意味する。保育園の「まどい」もこのように子どもたちが団欒できるものとして各所に設けた。

また、この保育園には異なる用途をもつ庭「マワリニワ」を設けた。保育園の周りにまとわりつくようについている庭である。周辺の環境に合わせて、保育園に属する「マワリニワ」と地域に属する「マワリニワ」というそれぞれ表情が生まれる。

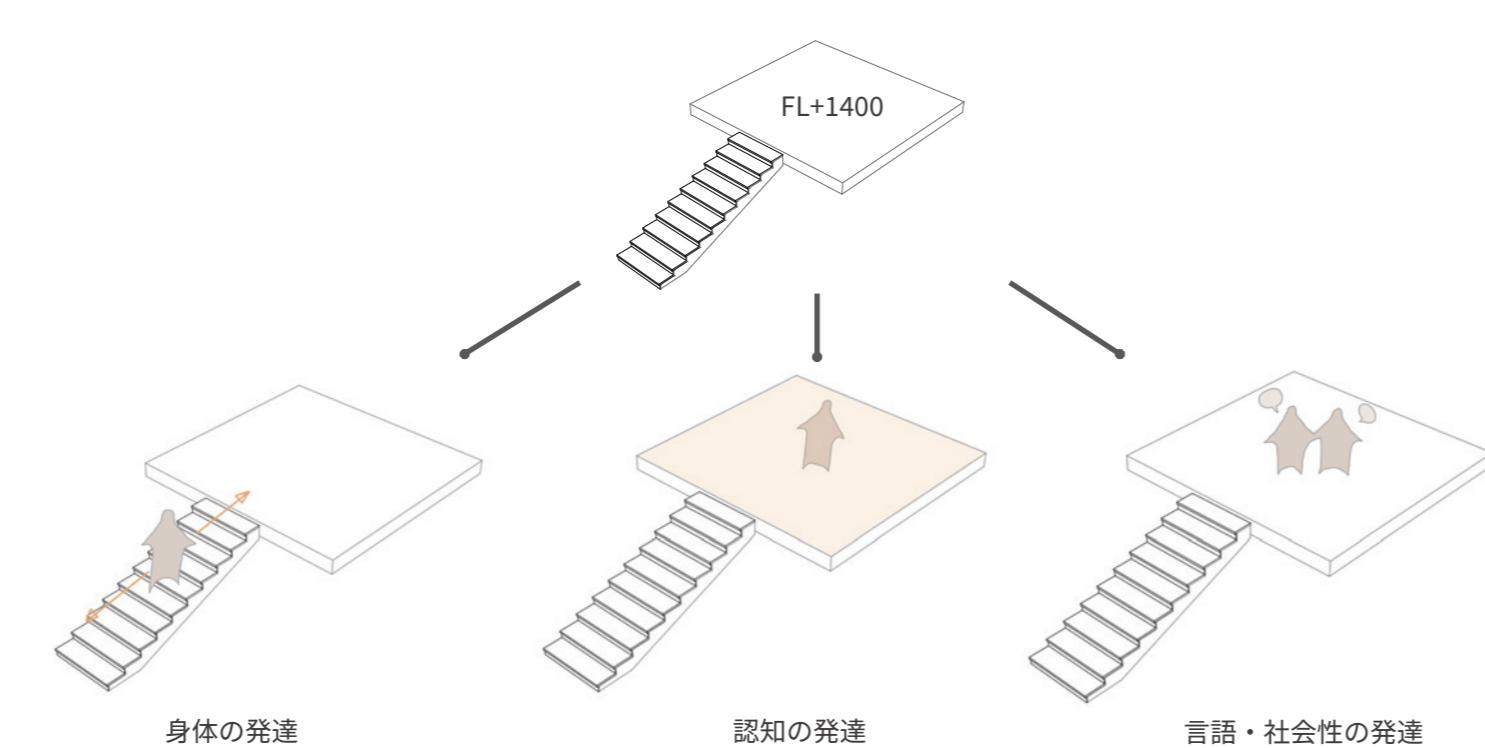
## ■住宅街に囲まれた立地

本計画地は、住宅街に囲まれた日常的な風景が広がっている。近辺には小学校や中学校などもあり、子どもたちにとって馴染み深い地域になると考えられる。敷地北側は人通りがあり、建物との距離も確保され、比較的開放感のある通りとなっている。南側は人通りが少なく、敷地に対して住宅の玄関があるため建物との距離が少しある。東側は人通りがなく、最も道幅が狭く周囲よりも高い建物が建っているため、圧迫感が感じやすくなっている。西側は人通りがあり、建物が道路の近くに建っているが全体的に低めの建物のため、圧迫感が感じにくい。



## ■子どもの居場所「まどい」

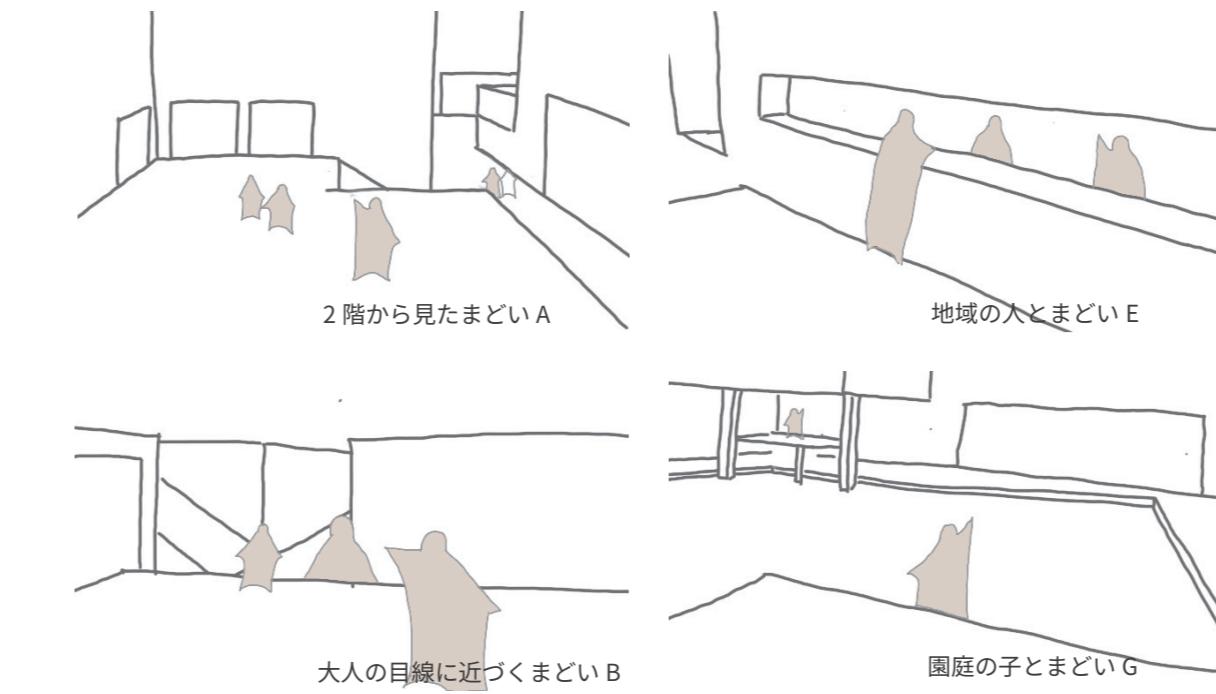
従来、保育園の中で子どもたちが過ごす主な居場所は保育室であった。しかし、乳幼児期は身体・認知・言語・社会性など、多様な領域が著しく発達する時期である。保育室での活動だけでは、これらの発達に十分に応える環境が確保しにくいと考えた。そこで、本計画では、園内の各所に中二階の空間である「まどい」を配置した。まどいを設けることで、階段の上り下りを通じた身体の発達、自分だけの小さな居場所として認識することによる認知の発達、さらに他者との関わりが自然にうまれることで言語・社会性の発達へつながることを期待している。まどいは子どもの移動・居場所の決定・他者と関わるといった多様な行動を受け止める居場所として機能する。



## ■近く視線

子どもの発達とは別にまどいを設けたことで、1階と2階に分断されていた空間にゆるやかなつながりが生まれる。1階とまどい・まどいと2階のようにすることで、上と下に分かれていた空間の中に視線が交わる重なりの空間ができる。まどいがあることで、同じ階にいても子どもたちがお互いの存在を自然に感じ取ることができ、子どもたちにとって新しいコミュニケーションを見つけるきっかけとなる。

また、まどいにいる子どもの目線が大人の目線に近づく。子どもにとっては、大人をより身近に感じられ見下ろされる関係ではない安心感が生まれる。この安心感が自分だけの小さな居場所を見つける楽しさにもつながっていく。一方で大人にとっても子どもたちの存在を気配としても感じ取りやすくなる。子どもがどこにいてもさりげなくフォローできる環境が整う。



## ■サッシのない開口に囲まれた外部空間

子どもたちにとって、地域の人々と日常的に関わることは、安全地帯の形成につながると考えている。顔見知りが増えることで子どもたちの中には「この地域は安心できる場所だ」という意識が育まれる。また、保育園と地域がつながることで、大人同士の交流も自然に生まれる。子どもの話題を通して、地域の人と保護者・地域の人と保育者など、様々な関係がゆるやかにつながり、地域全体で子育てを支える環境にもなると考えた。

このような地域との関わりを育むため、本計画では保育園の外部空間をサッシのない開口を持つ壁で囲む構成とした。壁に開口部を設けることで、園の前を通りかかった地域の人々が園内を見ることができます。



開口の大きさは均質にせず、まばらに設置した。園の様子がよく見えるように、そして周辺環境の圧迫感を和らげるよう、複数の抜ける大きな開口を多く配置した。一方で子どもたちの手が届く位置では開口を小さく設置し、子どもの安全面を考慮した。形と大きさが異なる開口を設置することで、かたい印象がやわらげ、壁の表情にやわらかな雰囲気が生まれる。

